米子市地方創生有識者会議（第３回）

日時：平成２７年８月１２日
１４：００～１６：１０
場所：米 子 市 立 図 書 館
（多目的研究室）

１． 開会

企画課長：失礼いたします。それでは定刻になりましたので、ただいまから第３回の米子市地方創生有識者会議を開催させていただきたいと思います。本日は先週に引き続き、そしてまたお盆前の大変お忙しい中、ご参加いただきまして大変ありがとうございます。まず、出席の報告をさせていただきたいと思います。本日は中西委員さん、山上委員さんの方からやむを得ずご欠席というような連絡を頂戴しております。また井上委員さん、齊木委員さんからは少し遅れて参加するというご連絡が入っておりますので、ご予定の委員さんはお揃いになっていることを報告させていただきます。
そういたしますと、さっそくではございますが、日程に従いまして進めさせていただきたいと思います。
まずは古賀座長さんの方からごあいさつをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

２． 古賀座長あいさつ

古賀座長：皆さんこんにちは。今日は夏のひと休みということで少し涼しいですが、皆さんお盆前のお忙しいところスケジュールのご調整をいただきまして、ご参加いただきましてありがとうございます。引き続きまして今回が第３回目ということで、第２回が先週の８月６日に行いました。その際に米子市の方から地方創生の取組に係る、現時点の方向性ということで資料のご説明がありました。それと委員の方からいくつかのご提案をいただきまして前田委員さん、倉間委員さんからの提案がありました。本日も ２ 人の方からの提案があるということですが、本日は引き続き皆様のご意見、ご提案などをいただきながら議論を進めていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

企画課長：古賀座長さんありがとうございました。そういたしますと、議事の方に入らせていただきたいと思います。議事進行につきましては、古賀座長さんにお願いするところでございますが、資料の確認をさせていただけますでしょうか。皆様方のほうには、前回配布させていただきました資料１から資料３と、冒頭古賀座長さんからもお話がございましたが、委員のみなさまからの提案をいただきました資料につきまして、前回のご提案いただきました資料と今回森田委員さん、花倉委員さんからご提案をいただいきましたものをひとつの委員提出資料ということでお配りをさせていただいております。その４つの資料がございますでしょうか？
そうしますと古賀座長さんの方に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

古賀座長：きょうの日程に従って議事の方を進めさせていただきたいと思いますが、議事に先立ちまして、

前回ご欠席でありました委員、今回新しくメンバーに参加していただきました山陰合同銀行の手島委員からひとことごあいさつをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

手島委員：こんにちは。山陰合同銀行米子支店長の手島と申します。これまで安喰が委員を務めさせていただいておりましたけど、異動によりまして私が後任ということで７月に着任しております。私出身が日野郡江府町ということで、高校も米子、大学以降は外に出ていますけども、入行したのが米子支店ということで、兵庫県から３年間の勤めを終えて、米子に帰ってきました。その前は米子西支店ということで、３年勤めています。その間１８年もブランクがありまして、県外ばかりおりましたけど、そういう意味でも米子を外から見る目というのは多少持ち合わせるのかなというのかなと思っておりますし、ぜひこの米子は事務的ではなくて本当に、他の地域に必ず勝つというような、地域競争に勝っていくんだという、そういったような計画をぜひ見させていただきたいですし、またつたない意見ですが、発表もしていきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いします。

古賀座長：手島さんありがとうございます。

３．議事

（１）米子市の地方創生への取組に係る現時点の方向性について

古賀座長：それでは議事に移りたいと思います。前回配られた資料の方から確認をとっていきたいと思いますが、米子市の地方創生への取組に係る現時点の方向性についてということで、米子市から説明がありました。これに関しまして、本日もしご質問等ありましたらご発言をいただきたいと思います。前回もご意見とご提案と混ざってしまった部分がありますので、この議事（１）に関しましては、資料１から資料３に関する質問とご意見のみとさせていただければと思いますので、どなたかご発言などありますでしょうか？

森田委員：前回説明を受けて、非常に厳しい状況になったなというのはよく分かったんですが、あえて聞いた方がいいかと思いまして。人口減が日本全体で２割減ということで、全体の話は分かるんですけど、米子市としては人口減を目標としているんですけど、よく我々の世界では宇宙に行くにはロケット基地を作らないといけないし、空を飛ぶんだったらジェットエンジンの設計をしなければいけない、目標設定によってやり方をまるっきり変えなければいけないというのがあります。そう考えると逆に、人口増を狙うような考え方っていうのはないでしょうか？

古賀座長：ありがとうございます。事務局からお願いします。

永瀬室長：事務局の方からお答えいたします。この人口ビジョン、具体的に言いますと、現在の米子市の人口が２０１０年の国勢調査では 148,271 人だったのですが、今回の人口の将来展望、２０４０年では13万８千人、２０６０年においては12万８千人以上というふうに書いておりまして、それを

ご意見としては上向きに目標設定するというような考え方もあるんではないかということでよろしいでしょうか？

森田委員：はい。

永瀬室長：これにつきましては、いち早く人口ビジョンを出されたような市町村の中には、かなり右肩上がりの目標設定を出されたところがあるというのは承知しております。ただし人口の構造自体が、それを容易にする環境と本当に確からしく答えを出すことができるのかと言ったら、そういう人口構造には今なってない、少子化の問題が大きいと。それから今、高齢者が今後ピークになっていきますが、たくさん亡くなっていかれるというような、自然減の状況がありまして、それをカバーするような、相当大きな社会増を生むというような目標設定ができれば、右肩上がりの目標設定も可能だと思うんですが、国あるいは鳥取県、そういった考え方を合わせて考えますと、米子市としてはそういった厳しい現状を冷静に受け止めながら、今回の目標設定をさせていただいたということでご了解いただければというふうに考えています。

古賀座長：ありがとうございます。これに関して、あるいはその他に関してご意見ご発言などありますでしょうか？ないようでしたら、次の議事に移りたいと思います。

（２）各委員による地方創生の取組に係る提案について

古賀座長：前回、各委員による地方創生の取組に係る提案として前田委員さん、倉間委員さんからご提案がありました。これについて前田さんからは、米子市のまちづくりに「サイクルシティ米子」構想についてということでの提案がありました。倉間委員さんからは米子市地方創生に向けた取組への提案ということで、創業支援センターの設置ですとか、創業者支援施策といったことに関する提案などがありました。これに関しまして、事務局の方から何か補足や説明などありますでしょうか？

永瀬室長：この時間を設けていただきましてありがとうございます。担当課長の方には、前回ご提案いただいたことに対して、もし提案の受け止めに必要な詳細の考え方、あるいは既存の米子市の取組に重なっている部分があれば、その事実関係について報告するように事前に調整はしていたんですが、どなたかありますか？よろしいですか。では本日はなしということでお願いします。

古賀座長：ありがとうございます。
　では改めまして、本日新しい提案がお二人から出ていますので、それにつきましての提案に移っていきたいと思います。それでは森田委員さんの提案につきましてご説明をお願いいたします。

森田委員：前回米子市さんの方から出ました、政策Ⅰから政策Ⅳまでのパターンに沿って、教育研究機関の視点から提案を差し上げたいと思います。

まず政策Ｉに対して１つ目でございます、企業誘致における魅力として米子市の高等教育機関活用を提案いたします。大都市圏からの企業が地方都市に進出するといった場合、物や金銭的な助成などの問題。それから物流上でのメリット、それから仕事上の利便性、人材確保が検討項目の中で非常に重要なようです。製造業などが進出する場合、この場合かなり大きなウエイトで重視しているのが、人材の確保という問題です。大都市部ではかなり人材が足りないという話はよく聞くんですが、よくよく話を聞いてみると、製造業では現場で実作業をするような要員に関してはなんとか足りているんだという話です。足りないのはそういった現場の人間、あるいは設備を管理統括するような人材がいない。あるいは管理統括できるように育てられるような元の人材が、特に大都市での中小企業では不足している。それを求めて地方に進出したときに、そういう人材が採れるんではないかと期待して出てこられる企業も多いようです。もちろん米子市が工業用地などを確保することを手がけられていると思います。あとは物流の面などで国への整備、働きかけは今までのとおり継続していただいて、かつ米子市としての進出先としての魅力を作るために、求められるような人材を提供できるような体制整備を特に米子市は鳥大と米子高専、２つの高等教育機関があるというメリットがあるので、これを活用してほしいなというふうに思っております。例えば私共の米子高専であれば、新卒も地元企業に就職できるように、地元の企業さんの努力で近隣の企業さんへの就職率も上がっております。また、すでに卒業した卒業生が約６千人ほど全国におります。これは大きな企業を含め、すでにキャリアを積んでいる人がもうそろそろ退職して何年かになるような時期でございますので、こういった人材を紹介するようなシステムも整えつつある状況ですので、これを米子市のこういった活動に協力できるかと思います。また米子市は大阪のみに支部がある状況ですので、今までももちろん協力体制にあるかと思いますが、県の商工労働部の大阪・東京・名古屋これらとの一層の連携を図っていただければ、こういった企業の進出によって総合的に転入の人材を増やしていけるじゃないか、そのために米子市にある高等教育機関を活用されてはという一つ目の提案です。

それから二つ目、奨学助成の設置を提案いたします。奨学助成というのは、県外から市内の学校への入学生に対して、少額であってもできれば返済義務の無いような奨学金助成の設置を提案するものです。県外からの入学生を増やすことができれば、前回の会議で説明がありましたように、10 代から 20 代の転出超過を抑制できるかと思います。この件は１番目にお話しました企業誘致とも関連しまして、例えば米子市への企業進出する企業の、本社が所在する都市からの入学生に対するアプローチなりを進めていただければ、例えば愛知県の企業であれば愛知県にアプローチする、福岡県であれば福岡県にアプローチするなどを、こういった制度を適用して進めれば、企業の進出地としての米子市の価値を高めることができると思います。一方で第１回目の会議のときに、国の地方創生関係の資料で国の指針が書いてありまして、これは県内の高校生は県内の大学に入学させる数を増やして、そのまま県内に就職させるというのが国全体の方針に書いてあります。これは地方都市にとってみたら、県外からの入学生を減らしていくということになりますので、地方都市にとっては転入減という方向になるのかなと思いました。この辺は国と地方都市とでちょっと方向性が変わるのかなという点がありますので、この辺は国の協力を得るためには、うまく考えていかなければならない点かと思います。現状を見てみますと、鳥取大学の学生さんは８割が県外の出身者です。約 5 千人いますので、4 千人は県外から転入してくるということになります。たぶん米子市の医学部であればもっと県外比率は高いんじゃないかなと思いますので、ここをなかなか増やすのは難しい

んじゃないかと思うんですが。もうひとつ、米子高専は定員が 1040 人、約千人います。このうちの 15%だけが県外者です。例えば半分県外から来たら、500 人転入者が増えるという計算になります。こういったところは、米子市に国立高専があるというメリットなり選択肢として、こういったところを活用する一つの手立てじゃないかなと思いますので、この奨学助成というのはそういうところを活用できるような一つとして提案差し上げるところです。

それから３番目、奨学金返済助成制度の導入を提案するものです。学生支援機構の奨学金ですね、高校、高専、大学で受ける奨学金は返済義務がございます。これは６千円から１万円ちょっとぐらいを約 10 年で返済するということですので、就職後苦学生だった子達にはけっこう返済が苦しいというところがあります。地方都市に就職したとすると、首都圏に比べて給料が少し少ないですので、こういったところが、例えば米子市に就職したいなと思っても、妨げの一つになっていると考えられます。こういったところの制度を作っていただければ、米子市へのＩターンとかＵターンとかの後押しができるんではないかというふうに思います。調べてみますと、山口県ではすでにこういう制度導入されているようです。また話を聞くと、鳥取県の方も今年、県議会にこの意見が提案されているという話がありまして、市町村ではまだ奨学金返済に関する助成はまだ見当たらないようです。ですからもし鳥取県で導入するんであれば、そこと相乗的にＩターン、Ｕターンのための取組ですね、こういったところに使えるところではないかなと思いまして提案いたします。この奨学助成とか奨学金返済助成に関しては、財源なんかも難しいんではないかと思いますけど、鳥取県は他の資金、いわゆる税金を使うような財源ではなくて準備するというようなことも聞いておりますので、何かそういう手だてがあるんであれば検討いただけないだろうかという点が政策Ｉに関する提案でございます。

続きまして、政策ⅡとⅢに関する提案です。米子市の新産業創出のための制度導入を提案いたします。市内の高等教育機関や、公設試験研究機関が持つ産業化につながるようなシーズに対する支援制度の設立を要望いたします。広く産業の掘り起こしをするために、米子市の企業や県外企業であっても米子市に雇用を生み出すような取組についても助成の対象となるのが望ましいんじゃないなかと思います。例で言いますと、１番目が医工連携シーズによる産業化です。米子高専の例でいきますと、不妊治療用の器具の研究シーズがあったりしますので、これは政策Ⅲに関連するところだと思いますが、そういったところのシーズに対する助成ができるんではないかとか、２番目として農工連携のシーズです。米子地区も含む山陰地区は、夏の平均気温が沖縄よりも高い期間があったりします。また、冬の期間は東北地方並みに気温が低い、夏と冬の気温差が全国的にも高い地域です。しかし米子市の農業就労人口比を見てみますと、全国よりは 10%ほど高いんですが、鳥取県全体で見ると 0.4 ですから、鳥取県全体の 4 割くらいしか就労人口がいないということを考えますと、なかなか大規模な農業生産にふるというのは難しいのかなと思います。その気候的な特徴と、米子市で取り組まれる林業とか、畜産業で出るバイオマス燃料などを使って、例えば施設栽培で高付加価値なトマトであるとか、いちごであるとか、こういった新しい付加価値を生むような取組に関するシーズがありますんで、こういった部分もこういう制度を使えば活性化できるんじゃないかと思います。それから３番目、地域指向型シーズによる産業化ということで、米子市の就労人口比を見てみますと、１番２番というのが、飲食店や宿泊業です。鳥取県全体割合の 1.5 倍ほどありますので、ここに力を入れるっていうのは、恩恵を受ける方が米子市では一番多いのかなと思います。それの一番大

きなところは皆生温泉かと思います。皆生温泉に関するところですと、皆生温泉は全国でも有数の高温の源泉を持つ温泉地ですので、こういう源泉を使って低コストの発電ができる装置のシーズを米子高専で持っていますので、これを活用したいと。ここに書いてありますが、米子皆生温泉ルミナリエ、イメージとしてはいわゆる神戸のルミナリエですね。これは20万個の電球で、それを見るためにかなりの人が来ると。皆生温泉は残念ながら、日中は弓ヶ浜が見えて、日本海が見れてきれいなんですが、夜の楽しみがなかなか散策するところがないと。地域によっては季節的に蛍が見えたりしますが、こういうことができないので逆に温泉熱で発電したものを全てお客さんが楽しむために使うという取組をすれば、初期投資がものすごく少なくて、お客さんを呼び込むようなことができるんじゃないかなと思います。それもシーズ活用の一例としてお話させていただきました。それから皆生温泉に関して、宿帳などから文化人、著名人などの宿泊と作品に関する編さん資料を整備して、歴史的な文化的な魅力を付加するような取組ですね、こういうところも新産業創出の中で入れていけたらいいなと思うところです。皆生温泉は 115 年を超える歴史がありますので、宿帳などで文化人が泊まったという記録が残っているのがあるんです、有名な方もたくさんおられるようです。こういったところの資料編さん整備に関しては、米子高専は理工系のイメージがあるかと思いますが、実は文学博士が 4 人おりまして、その他事務科系でも博士号を持つような研究者がたくさんいます。ですからこういう研究者がいる組織が米子市にあるというのも頭に入れていただいて、この辺を有効に活用するようなことをお願いできればと思います。それから次は米子城ですね、米子城に関しては、松江城が国宝に指定されたので、これは非常にチャンスなことだと思います。松江城あるいは世界遺産でもある石見銀山とかですね、もちろん出雲大社なども含めてこれを機に米子にも観光客が来てくれるような整備をされてはどうかと思います。ご存知かと思いますけど、米子高専には米子城を専門に研究している教員がいますのでこの辺を活用したり、話を聞きますと、米子城と松江城は歴史的にはほとんどリンク、関係はないそうです。ただし建築の様式としては山陰独特の様式で共通性があるそうです。ですから何か共通性なり、松江城をめぐった後に米子城を見て、その面白さがさらに深まるような取組ですね、こういうところに活用できないかなと思います。ここまでが第２回で但馬副古賀座長からもご提案あったように、鳥大医学部とか米子高専とか、この辺をより米子市にあるということを活用して、どんどん活かしていただきたいという提案でございます。

最後政策Ⅳに関して、地理的な特徴を生かして、世界的に注目度の高い催し物の誘致による、米子市の知名度アップを提案いたします。一つの例が、空のＦ１と言って今年 5 月に千葉県の幕張海浜公園で行われた「レッドブル・エアレース」という名前だそうですが、プロペラのレース用の飛行機で海上でレースをするということなんですが、私テレビで見たときに千葉じゃなくて弓ヶ浜にしか見えなかったんですけども、弓ヶ浜でこれができたらさぞかし人が集まるだろうなと思って調べると、有料の観戦者ですね、これは 6 千円から２日間で 30 万円まで正規の値段があるそうですが、お金を払って見た人だけで 2 日間で 12 万人いたそうです。首都圏だということもあると思いますが、これが開催されれば人が来るっていうのと、一番は米子市の名前が、マスコミなんかを利用して非常に大きく知名度を上げられる。やはり誰か行こうと思ったときに名前の候補に挙がらないと、絶対行かないですから、まず名前を認知してもらうというのが大切かと思います。一番効率的なのは、こういう外の力と言ってはなんですが、こういった外の力を呼び込むような取組というのが一番即効性があるんではないかなということで提案させていただいております。下に地図か

プリントしてありますが、右側が東京湾の幕張の地図でして、左側が弓ヶ浜ですね。見ると、南側に開いているか北側に開いているかっていうだけで、実は海岸線の幅は同じなんですね。東京湾で開催するといったときに地理的な制約があるかと思いますが、弓ヶ浜、逆に言えばもしかしたらむきばんだ遺跡からレースが見えるかもしれないし、美保半島からも見えると思います。こういったところの地理的な特性を生かして、招致ができればいいなと思います。これは松江市とか近隣の市町村、特にこのレースに関しては、東京で開催された時は自衛隊の協力なんかもあったようです。境港がやはり航空自衛隊にテコ入れして、市を盛り上げようという動きがありますので、この辺は境港、自衛隊、松江、近隣市町村と合わせて共同でまちを伸ばしていけるような取組を考えていただけないかなというふうに思います。この他に書いてはいないんですが、例えば世界的に有名なアメリカズカップとか、今現在沖縄から愛知県に向けて 1,300 ㎞以上のヨットレースをするような催し物をやっているようでして、海があるというところはこういった取組、催し物を呼び込めるのはいいんじゃなかと思います。この辺をまちが持っている地形的な財産を生かしていただければと思います。何よりこいうったものを呼び込みますと、米子市の子ども達がそういうところを見ることで、今後の将来の夢なんかに、新しい視点から刺激を与えられるというところがありますので、この辺も前向きに考えていただければと思いまして提案させていただきました。

古賀座長：森田さん、ありがとうございました。まず人材育成に関する 3 つのご提案がありました。それから産業化に関するところのご提案で、例えばルミナリエ等の興味深いご提案もございました。それから地形的な財産。私も目から鱗でありましたけども、空のＦ１という非常に面白い斬新なご提案もありました。このご提案につきましてまずは市から何かご発言ありますでしょうか？

商工課長：この政策Ⅰの３番目に掲げていただいております奨学金の返済助成制度の導入ということでご説明させていただきたいと思います。資料の 12 ページ、政策でいくとⅡになると思うんですが、3 番目に若者の人口流出抑制と学生等市外転出者のふるさと回帰促進ということで、ここに簡単にあげさせていただいておりますが、この 2 番目に新規学卒者に対する移住就労支援ということで、奨学金利子助成、これは先行型ということで今年の２月の補正予算の方に計上させていただいて、現在取組を進めているという制度でございまして、日本学生支援機構さんの有利子の奨学金の受給されている方が対象とさせていただいておりますが、元本ではなくて支払われる利息、それについての助成をしようという考えでございます。ただこれは、助成期間につきましては３年間程度ということで予算計上させていただいておりますので、それ以後の利息っていうのは対象とはならないんですが、3 年分の利子の助成を行うということで、地元から県外に進学された方をメインターゲットにしようという考えで、こういう制度を思い立ちまして、なんとかして地元に帰ってきていただこうという思いで、こういう制度を取組ませていただいているという状況でございます。

地域政策課長：高等教育機関の方を担当しておりますので、少し答えさせていただきます。まず政策Ⅰの方の提案なんですが、卒業生と人材を紹介できるシステムを構築ということでのご提案だったと思います。今までそういうことを考えていませんでしたので、また参考にさせていただけたらなということと、県外からの入

学生に対しての奨学助成ということで、高専のお話で 15%が県外の出身ということで、これを半分が入学されたらそれだけ人口増につながるというご提案でした。高専に行けなかった県内の高校生がまた県外に出てしまうようなことも考えられるかもしれませんので、これについてはまた検討させていただきたいなと思います。それから商工課からの説明もありましたけど、資料 3 の 11 ページの一番頭に仕事の種シーズづくりへの支援ということで、高等教育機関の研究支援ということで、先行型ではないんですけども、今考えているところでございます。先生がおっしゃっていたように、市内には鳥大の医学部がございまして、この件に関しては古賀先生の方にもご相談に行かせていただきましたし、高専の方は地域共同テクノセンターのセンター長であります新田先生の方に、これも先日、市の補助事業としてこんなものを考えているんですけど、どうでしょうかということで、いろいろご提案をいただきましたので、このようなことも付け加えて、今後検討してまいりたいなと思いますのでよろしくお願いします。

経済戦略課：まず政策Ｉのことで追加してご説明申し上げます。私どもは企業誘致を担当しておりまして、製造業系の企業さんをお迎えするときには、鳥取大学さんですとか米子高専さんが米子市にはあるということは常々申し上げて誘致に向かっております。その中でも過去にもあったんですが、製造業系の企業、このときに高専さんにもごあいさつに伺ったんですけども、この時期タイミングが悪かったのかもしれませんが、5 月の終わりに行きましたところ、5 月の連休前にほとんど就職決まっていますよと、それくらい高専さん人気があるところでして、立ち上げのときになかなか高専の生徒さんを採るのは難しいのかなというのは感じております。ただし、言われました高専の卒業生のネットワーク、これは期待しているところでございまして、企業さんとしては立ち上げのときには、管理する人間を養成したいと、その場合には優秀な人間が欲しいと、これは常々言っておられます。その中でどういった人間を採るかというと、前回もいろんなところから採用されたんですけども、履歴書を見てみたら、高専卒の学生さんが大半でしたという結果も出ておりますので、今後とも高専さん、鳥大さんも合わせて仲良くやらせていただきたいなと思います。それともう一つ、それらのシーズによる産業化というのがございますけれど、特に医工連携につきましては、古賀先生がいらっしゃいますけども、古賀先生のところとも協力しながら、今後何ができるかということを探っているところでございまして、できるところはやらせていただきたいと。ただ、市も小さなものですから、できる範囲っていうことになると思うんですけど、今後引き続きやらせていただきたいと思います。

古賀座長：ありがとうございました。その他、市のほうからご発言ないでしょうか？
人材育成に関しまして、いくつか触れていただきました。鳥取大学医学部附属病院としての医工連携というところで、米子高専さんとの教育連携というのも進めたいということで考えておりまして、先般も但馬さんからもご発言いただいたところであります。私達、「発明楽」というものを発明に関する教育法を元にした、医工連携に関する取組をいくつかやっておりまして、医学部の学生だけではなくて、様々な学部出身者が集まって、研究開発に参加するといったことをやっています。その中で米子高専さんとの教育連携ということも模索していきたいと考えているところでございます。その他産業の育成に関しまして、人材育成としまして、これから考えていきたいと思っておりますので、社会人の方の、私達学び直しと呼んでいますが、そういった方々に新しく医学の知識をつけていただいて、新しい医療機器とか、そういった医療系の産業への進出、

そういったところの就職といったことに対しての、私達は人材育成として協力できるんではないかということを考えておりまして、そういった社会人の受入、職に就けるといったとこへ対する人材育成といったことも現在検討しております。ぜひそういったところに、米子市に企業が誘致されてくれば、そういう人々が実際に就職していく、そういったチャンスを与えるまちにもなっていくと思いますので、ぜひそういった形で、教育に対しての支援というのを進めていただきたいと考えております。
今回の森田委員さんのご提案ですけれど、委員の方から何かご意見ご発言などありますでしょうか？

但馬副座長：意見ではないんですけど、奨学金の助成制度というのは、鳥取県の方では、正式な名称忘れましたけど、未来産業人材育成基金というのを作っておられまして、国の地方創生のお金を使われて、県が 1,800 万円、民間が 2,000 万円の合計 2 億の基金を作って、県外におられた方が鳥取県内に就職された時のそういった奨学金の利息部分を負担するという制度を作っておられますので、そういったものとの関連性も含めて、同じような内容であれば一つに絞るとか、両方使えるのであれば、両方使えるような制度設定をするとか考えられたらいいのかなと思いました。

古賀座長：ありがとうございます。このご発言に対しまして、市から何かご発言ありますでしょうか？
よろしいでしょうか。その他何かご意見などありますでしょうか？

手島委員：奨学金等の制度はいろいろあるんでしょうけど、ここに書いてあるように制度はどこでもあるわけですから、米子でしかないというものを作って、要は若い人にこちらに残ってもらうとか、あるいは誘引していかないと、どこにでもある奨学金制度では、面白味に欠けるというか、インパクトに欠けるというか、そういう意味で自治医大のように、10 年は学卒者を地元で就職されたら、全額学費を免除するとか、そうした思い切ったことが一つあれば、米子市は全国に発信できるんではないかと。これは実現可能かは別として、通常の制度がこういうものがありますとかっていうことはなかなかどこにでもあるようなものなので。パッと聞いてハッとしないような感じがしましたので、まさに若い女性に残ってもらわないと子どもがどんどん増えていかないと、出生率が上がってもそういうことのようですので、若い方に県外から来ていただいて、残っていただくという政策がまさに必要なんじゃないかなと思いました。
また政策Ⅳのレッドブル・エアレースというものはテレビで見るくらいしか分からないんですけど、非常に地形を活かした大山・皆生というものは私の私案もあるんですけど、こういったものを表に出して米子はこれだというものを全国に発信していくというものが必要なんじゃないかなと思いまして、非常に共感しております。米子市っていろんな各部所の方でこういったことをやっていますという政策的に総花的なお話も、日常の行政側の業務としてあるんでしょうけれど、何かひとつこういうものをやっていくんだというものについて、できるのかできないのか検討していかないと、いろんな提言について、いやこういったものがありますとかを言っていただいても、それがあまりパッしないんで、あまりいい実情になっていないんじゃないかなというふうに思います。

古賀座長：ありがとうございました。確かに総花的になってしまうというところがあると思います。やはり尖がった部分をもっともっと尖がらせていくということがとても大事で、ここに集中するといったことがあってもいいよう

な気がします。先ほどの提案のところの皆生温泉というのは一つの大きな観光資源だということで、私も実際鳥取の人間じゃないものですから、東京から米子に来ると、米子空港ではみんなが皆生温泉ってどうやったら行けるの？というように観光客が立ち往生しているということがあって、実際聞いてみたら、空港の連絡バスで富士見町かどこかまで行ってそこから、別の皆生温泉行きのバスに乗らなきゃならないという。もし直行のバスがあれば、だいぶ皆生温泉の行き来っていうのはできてくるような気がするんです。そういう形で一つ一つ、まだ大した案じゃないかもしれませんが、これを皆生温泉を復興させると言いますか、一つの観光資源として特徴を立てていくということを考えるとしたら、これができる、あれができるということを寄せていくというようなことがあってもいいのかなというふうに思いました。今のご発言に対して市から何かありますでしょうか？

観光課長：只今の皆生温泉のお話ですけども、ご承知かと思うんですけど、皆生温泉は昭和30年代、40 年代、50 年代前半にあたりましては非常に大きな集客、米子市の経済が大きく栄えていたというところなんですが、お客さんの動向が変化していました。そこについていくことが難しかったということで、現在市の方でもいろいろな形でテコ入れをしているところでございます。現在、今年中に皆生温泉のグランドデザインを皆生温泉旅館組合や市が中心となって作成いたしまして、その中で今後短期的な計画としては３年間、長期的な計画としては将来的なもので３０年くらいまでの計画を受けまして、短期・中期・長期的な計画を作成いたしまして、テコ入れを図っていくという計画にしております。その中で今回皆様からいただいた意見を反映していきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

古賀座長：ありがとうございます。ぜひよろしくお願いします。その他何かありますでしょうか？
よろしいでしょうか、それでは次の提案についてお話を進めていきたいと思います。それでは花倉さんからのご提案よろしくお願いいたします。

花倉委員：私の方からはしごとというキーワード、ポイントに提案をさせていただきたいと思います。まずは具体的な施策の提案です。Ｉのしごとを守り生み出す元気なまち「がいな米子」の創生という部分ですが、資料３の10ページから11ページにかけてなんですが、ここに若者の活躍促進という項目立てがないんですよね。たぶん市役所さんの中で、すでにＵ４０ですかね、そういう方々が施策を考えているということですので、当然入ってくるんでしょうけど、私から提案させてください。例えば、若者の交流事業、コンテスト、表彰事業ということで、特にこれをやってくれということではないんですけども、中身は考えていただければと思いますが、若者が何か表に出てＰＲするとか、発表の場を設けるとか、何かそういった若い人がそういった頑張っているんだぞということを見せてくれる、そういう場がほしいなといったところでこういった提案をさせていただきました。それから新規学卒者の早期離職防止の取組ということで、みなさんご承知のとおり、新規学卒者の方が、就職して３年以内に、高校生の場合約５割の方が離職しているというのがずっと３０年くらい言われていることです。最近ですと、高校ですと、全国が 39%、鳥取県で 42%が離職しています。問題なのはその中で、一年目が非常に離職率が高いんですね。20%が一年目で辞めてしまっているというような状況ですので、この一年をどうやって離職させないかというとこが国でも県でも取り組まなければなら

ないような状況です。そこを何か、職場定着奨励金、先ほどの奨学金の返済の話ではないんですけど、ずっと勤めていたら返さなくてもいいよとか、こういった奨励金を出しますよとか、そういったインパクトのあるものがあれば、だいぶ定着率が違ってくるのかなというふうに思います。最低一年勤めたら、失業手当の資格もできますので、一年というのがキーポイントになってくるんじゃないかなと思います。次に高齢者等の活躍の促進という部分ですけども、米子広域シルバー人材センターの活用の取組を入れたららどうかということで提案させていただきました。この米子シルバーっていうのは、全国的にも受注額ですとか、会員数の多さで、非常に高い評価を受けているシルバーです。ですのでこういったシルバーをもっと活用して日本一のシルバーにしてもらったらいいんじゃないかなと思います。あるものは使えというところで、高齢者の活躍というところもお願いできる施策があればというところです。
それからⅡにひとを呼ぶ魅力あるまち「がいな米子」の創生の部分ですけども、資料的には 12 ページ、13 ページになるんでしょうかね。ここで魅力あるという部分で、魅力ある企業、こういったところに対する、独自の認定・登録制度を創設したらどうかというところなんですけども、これは次のところにも関連するんですけども、魅力ある企業であれば、当然人が呼べるんではないかなと思っております。ただ、魅力ある企業っていう物差しっていうのは、非常に難しいんじゃないかなと思うんですが、そういったところを米子市独自で認定制度とか、登録制度とかを作ってみてはどうか、それを企業にどんどんＰＲしてもらうと。そうすれば何かの形で、その企業に人が集まってくるというような現象が起きるんではないかと思っています。よく県外に出られた大学生なんですけど、帰ってくるときに県内にどんな企業があるのか分からなかったというような話をよく聞くんですよね。ですので、企業の努力も必要なんですけど、それを行政的にＰＲしてあげるというようなことも大切じゃないかなというふうに思います。それから企業ではないんですけど、魅力ある○○というふうに書いております。これは魅力あるまちであったり、ひとであったり、商品であったり、様々な方面で考えられるのかなというふうに思っておりますので、米子市独自のものができるということを、誰もが考えていただきたいというところです。
次に提案になるかは分からないんですが、「重要業績評価指標」への提案です。これは今のところ具体的に数字がどうこうというのは書いてありませんけども、提案できるのであれば、以下のところですね、基本認識のところにありますように、様々な課題があるかと思うんですけど、その解決のためには、行政でありましたり、市民一人ひとり、特に産業界の協力っていうのは非常に不可欠だと思っています。それらの検証のために「見える化」も重要ということで、仕事の面でいきますと、今県でありますとか、厚生労働省のしごとの部分なんですけど、これからの鳥取県家庭教育推進協力企業とか、それ以下ですね、６ 項目くらいの認定制度、登録制度があります。これを少し増やしていけば、「見える化」も図れますし、企業にとっても魅力あるものになっていくんではないかなというふうに思っております。特に資料の 14 ページ、ワークライフバランスの促進という部分があるんですけど、ここでは啓発事業にとどまっているんですね。啓発するのは非常に大事なことなんですけど、その成果はどこに現れてくるかなということころがちょっと見えずらいということですので、もし入れていただけるのであれば、こういった成果のために、こういった企業のがんばりを評価として入れていただきたいと思います。

古賀座長：花倉さん、どうもありがとうございました。ご提案ですけどしごとに関する、まず若者の活躍とい

うところはどういうふうにしてこの施策に入れるべきかということで、2 つほどのご提案がありました。その他シルバー人材センターの活用ですとか、それからもう一つは、企業の評価というところで、特に魅力がある企業というものをどうやって際立たせるか、それに関して米子市が独自の評価軸を持って評価をしていくということがあってもいんではないかというご提案でした。まずこれに対して市から何かご発言がありますでしょうか？

商工課長：Ｉの２番目ですね、新規学卒者の早期離職防止の取組ということで、ここに挙げていただいているんですけれども、これまで職場定着支援助成金ということで、事業主さんの方にこういうような助成金が国の方で用意されていたかなというのは思うんですが、今ご提案いただいているのは、事業主ではなくて、その働いている人に対して助成金を支給したらどうかという意味合いでしょうか？

花倉委員：そのとおりです。半々でもいいかと思うんですけれども、企業に支払う助成金というのは結構たくさんあるんですけど、個人がいただくものというというのは多分ないと思いますので、あってもいいかなというところで提案させていただきました。

商工課長：分かりました。ちょっとその趣旨を確認させていただきました。

古賀座長：その他、市の方からありますでしょうか？

企画課長：少しご質問なり、お聞かせいただきたいことがありまして、新規学卒者の早期離職というのは、非常に高いものがあるというのは、私共も承知しております。そこの 3 年以内でこれだけのパーセンテージが高い数字が出ているという原因としては、どういったところにあるのかなというのが、少し市の方ではっきり把握しきれていないところがございまして、そういった花倉委員さんの今のハローワークのお仕事の中で、そういった原因等どういったものが、千差万別あると思いますが、だいたいどういったことが原因であるのかというところがあればお教え願いたいと思っております。
それからあと 1 点ですけども、18 歳の崖と言われていまして、人口ビジョンの中間とりまとめにもありますが、大学の卒業に関して一時的に県外に若い人が出て行くと、少し前はそれが県内に 20 代・30 代で帰ってきていたというのが、少し帰ってくる数が少なくなってきているというのがありまして、これも人口減少の抑制に関しては非常に重要なポイントだというように考えているところでございます。その県外に進学した学生さんが、地元にどういった企業があるのかというのがよく分かっていないというところがありまして、おっしゃるとおりじゃないかなと思っております。またその辺りは例えば、高校在学中あたりからそういった地元企業の紹介なりをするというようなことも一つの手ではないかなというようなことも考えておりまして、その企業なり人なり商品を、魅力ある企業を紹介していくというのも一つの案になるかもしれませんが、そういった高校なり、高専在学中からそういった企業を紹介をしていくような、あるいは古賀座長さんのところの鳥大の学生さんが在学中から紹介をしていくなり、そういう地元企業との接点を持っていくというのは、私共市としては小中学生までしか持っていないものですから、そういったところが可能なのかどうなのかという点もお教えいただけたらと思っております。

古賀座長：ありがとうございます。花倉委員さんからお願いします。

花倉委員：どういったところに離職原因があるというご質問でしたけれども、いろんな会社の方、高校の先生とか、会合がありますと、必ずこういった問題が出てくるんですけども、会社からは高校生への指導が悪かった、教育が悪いんだと言われます。学校の先生からは、もっと会社で人材育成をしっかりやってほしいという話が出てきます。これが２０年、３０年続いているのが状況だと思います。最近、景気の関係で離職率は落ちてきているんですけども、実際辞められた方に離職理由を聞きますと、自分が思っていたのと違っていたというところが一番トップで、あとは人間関係であるとか、会社の風土が合わないとか雰囲気とかそういうことですので、心理的なところが非常に大きいという部分があると思います。直接の原因というのは個人の考えですので、ちょっと分からない部分があるんですけども、できるだけ辞めさせないような施策というのは少しずつやっていると。高校生で言えば、応募前職場見学というような制度とか、求人事業者の説明会ですとか、入社してからでも新入社員のフォロー研修とか、少しずつやってきているんですが、なかなか離職率の原因の１位というのは、自分の思っていたのと違っていたというところが一番大きいと感じております。

古賀座長：ありがとうございます。離職理由っていうのは、いろいろだと思いますが、私達も若者と相対してますと、最近の若者はとよく言いますが、我慢ができない人が多いとか、自分の腕っ節を信じて、次のキャリアアップという形で、次の世界を探す方もいらっしゃいますし、いろいろだと思いますが、企画課長さんがおっしゃるとおり、県内の企業のことを知らないというということも、もう一方ではあるとは思います。一部の方から聞いたのは、県内の企業ではなくて、魅力あるよく知名度のある企業にまずは１回は就職したいということを思う方がたくさんいらっしゃって、先ほど花倉委員さんおっしゃったとおり、行ってみたら自分の思っていたとこと違ったということで、幻滅して帰ってくるということも多々あるように聞いていますので、おそらくそういった花倉さんからのご提案がありますような、魅力ある企業というものをこの地元でいかにして作っていくか、いかにして若者達に知ってもらうかということがとても大事なのかなというふうに思いました。それから、人材育成教育機関として考えますのは、そういった若者が就職して、一箇所にとどまってじっくり仕事を行うという姿勢に関して、やはり教育機関として教育をしていかなければいけないのかなということも一方で考えました。
これに関しまして、皆様何かご意見などありますでしょうか？

森田委員：今のお話伺って参考になれば思うんですが、米子高専はご存知のとおり、5 年一貫性で、それにプラスして２年専攻科というのがあります。これ高校で行くと、大学の学部、学士の学位が取れるんですが、1 年生から専攻科までの７年間の間、必ず年に１回か２回は卒業生なり、企業の方が来て先輩とか、あるいは先輩じゃなくても、企業での仕事の内容とかこういうところを講義してもらったり、キャリア支援ですね、自分が就職した後にどういう仕事をするのかということを教える機会等、あとは３年生以下であれば、夏休みちょうど今やっていますが、確か３０社ほど工場を、プレ・インターンシップと言って、県内の企業

を見学して回るということで、今年は７０名くらい、３年生以下ですので、高校生の年代の子が見学に行って回っている。米子信用金庫さんもおられるし、近隣の製造業もあります、色々なところを全部回ったりして、どういうところで働くというイメージを持ってもらうということを進めています。離職率の話ですが、私共性格に高専卒業生が離職率どのくらいかっていうのは、実は掴んでいないんですが、１０年ほど前に専攻科過程を作った後５年くらいですね、卒業して名だたる有名企業に入るんですけど、やっぱり違うということで専攻科に入学し直してくる子がけっこういたんです。これはまずいということで、低学年から学科とか独自に、そのキャリア支援をする。具体的に何をするかというと、３年生までは資格取得、こういう資格がいるんだよ、こういうことが使えるんだよということをやるし、４年生になったら１年間かけて、先ほどの話の中にもありましたけど、５月にはほとんどみんな内定がとれてしまう。ですから５年生に上がってから決めるんでは、数週間で一生勤める会社を決めなきゃいけないので、４年生に上がったらもうあと 1 年しか自分達の将来働くところが分からないということになるので、その１年間かけて教育していきます。それは具体的には４年生の中にインターンシップがあって、どういう業種でどういう働き方をしたいのかというのを教えたりするわけです。そういうことを始めてから、専攻科に入り直したいというのがほとんどなくなりました。企業側の教育っていうの問題もありますけど、やっぱり教育側がちゃんとそういった機会を作っていってあげるというのが、彼らが働く場に意識を持たせるっていうところ、ひいては職場定着の一番だと思います。ですからこういった奨学金助成などで、思いとどまる方もいらっしゃると思うんですけど、やはり仕事が楽しければ、多少給料が安くても喜んで働くと思います。その辺は市では中学校までしかという話がありましたけど、高校などとキャリア支援の取組をされるというのが、市としてサポートできること、あるいは我々としてもありがたいことじゃないかと思います。もう一つ付け加えますと、米子高専には 120 数社くらいあると思うんですが、米子とか山陰地区の企業さんの応援団体があります。振興協力会と言いますが、これは平成３年に設立されて、やっぱり元々は高専卒業生が求人倍率 20 倍ありますので、なかなか地元で採れないということで、７年くらい前から振興協力会の企業さんが、企業説明会ということで、近隣の企業だけでなく全国の企業がビックシップに 100 数十社集まって、米子高専生だけに会社説明をする。これで、かなり地元の企業でもいい会社があるんだということで学生の中で認識されました。またそういうことにプラスして学校と地元企業さんが共同研究をしたりして、地元企業でも業績も良くて、技術力もあって、魅力的な会社があるということが認識されて、去年は学科によっては 25%くらいは地元の企業就職しております。その前の年は 13%くらい、その前は 10%を切っていたということなんですけど、やっぱり企業さんの知名度ＵＰの努力と、学校側の協力がなければ、定着なり地元に就職してくれる、いい人材が残らないというのは解消できないと思います。参考になるかは分かりませんが、その辺でサポートするような体制を整えていただければと思います。

古賀座長：森田委員さん、ありがとうございました。特に私も存じ上げなかったんですが、インターンシップとして、県内企業を学生さんが就職前に回るとか、それから就職説明会という形で企業さんの説明を受けるとか、そういう機会が増えてくればくるほど、県内企業への認知っていうのが広がっていって、就職のチャンスも生まれてくると思いますので、ぜひこれをこの先、拡大・拡充していっていただけたらと思います。私達鳥取大学でも、例えば県内の企業さんとの交流という格好で、企業さんに来ていただいて、様々な共同研究などの機会を持つことで、企業のことを知るといったチャンスというものを設けるようにしておりますけど、な

かなか具体的な成果に結びついておりませんけれど、そういう形も模索している状況です。ぜひ花倉委員さんのご提案と併せて今後の参考にしていただきたいと思います。
その他ご意見などありますでしょうか？

中元委員：私も小さいながら会社を経営している者として、若者の早期離職の防止ですね、なかなか今の若い方の考え方、価値観とかそういったものがあるので、そういった奨励金だとかしてもなかなか成果が現れないのかなと。それよりも会社側の体制ですね、経営者ないし管理職、そういった方々の考え方、もしくは方向性そういったもののセミナーであったり、何かサポートするような企画をしていただいたり、助成していただけたりするものの方が、若者の流出の抑制につながるのかなとは思います。

古賀座長：ありがとうございました。企業の態度としての意識付けということでセミナーという格好もアリなんではないかというご提案ですが、市の方から何かありますでしょうか？

企画課長：ご提案いただきましたので、今すぐできる、できないというのはこの場では言えないんですが、商工会議所さんあたりもかなりそういう経営者セミナーなどをやってらっしゃいますので、会議所さんなり商工会さんなりのそういう中で、一緒になってやるようなこともあるのかどうか、またそういったことも含めて考えさせていただけたらと思います。

前田委員：今の部分を補強するような、前回の議論からつながる話なんですが、米子商工会議所さんが、米子市の高校生向けに創業のビジネスゲームを行われまして、私共も参画したんですけども、市内にある４つの高校から１５名集まられて、３チームでそれぞれ会社を作って実際に会社の経営を体験してみるというような１日コースでしたけれども、そういったセミナーを行いました。これは非常に有意義だったと思います。先ほどから出ています離職率が高いという問題ですが、社会の現実を知らない学生さんが、いざ社会に出たときにリアリティショックにぶつかってしまうということがよく言われていまして、その原因としてはキャリアレディネスが不足していると、要するに働く心構えがなかなかできていないというようなことが言われるんですけど、それもそのはず、学校教育でなかなか社会の仕組みがどうなっているとか、会社がどうなっているのか、会社に入ったらどうなるのかなんていうのは、なかなか授業でやらないわけです。ただ、米子商工会議所さんが意識を高められて、そういった部分をケアしていこうということで、この間早稲田大学発ベンチャー企業であるセルフウイングさんがやってらっしゃる、学生向けの起業家教育プログラムを実践されたんですが、私もそこに立ち会ってみて、非常にいいことだなと思いましたのは、会社というのはいろいろ役職があって回っているもので、協力しないと会社というのは回らない、個々人が自分の成績だけを求めても、会社というのはうまくいかないということを実際に体験できてしまうんですね、非常にいい経験だったと思います。そして自分達がいいと思っていたものでも、お客様が評価してくださらなければ、物は売れない、結果給料も出ない、こういうことを模擬的ではありながら実際に体験してしまうという、すごいセミナーだったと思うんですが、これを行われておりました。これをぜひ皆様にご覧いただくと、言葉を尽くすより納得性が高いんではないかと思うんですが、こういったような体験を学生時代から積んでいくということが非常に貴重なことだと思います

し、会議所さんの方ではできればこれを拡大していきたいというご計画のようですので、次年度以降も市と会議所の連携などを軸にそういった取組を広げていただきたいと思います。

古賀座長：ありがとうございました。創業ビジネスゲームというものがあるということは初めて伺いました。確かに面白い取組だと思います。そういう形で働く人の態度というのもしっかりと就職前に身に付けるというのは、とても意義があるかなと思います。
但馬副座長さん、何か補足などありますでしょうか？

但馬副座長：今前田委員が言われましたように、ある意味ゲームではありましたけど、実際事業計画を立てて、既製品に見立てたものを作ってそれに値段をつけて、評価してもらって売って、決算していくというところを実際に体験してもらいました。評価をして、お互いにする中で、どうして自分達がいいという評価を下したものが、評価をしてもらったら逆の評価になったというところで、その辺の議論をしてもらいました。実際に高校生の白熱した議論みたいなものがあったので、非常におもしろかったというか、社会に出たときにこういうやり取りが行われているんだなということを模擬体験してもらったということは本当によかったなと思っております。ただ今回高校生ということでやらせてもらいましたけど、教育委員会さんの絡みがあって、生徒さんを集めるのに苦労したというのを聞いておりまして、これが中学校であれば米子市さんで束ねられるといいますか、こういった声かけをしてもらえるのであれば、中学生向けにそういうものをやればもっと広く中学生の人にも体験して、社会とはこんなもんだなということを覚えてもらうことができるのかなと思います。それから新しく入られた人と言いますか、会議所としてはいろんなセミナーやっていますけど、４月には新入社員の研修会というものやっていまして、これが会社に入られてからの基本的なマナーを身に付けてもらいますというところで、始めは挨拶から入っていくというようなところで、それが糧といいますか、学校教育なのか分かりませんが、そういったところでできていないっていうのがありまして、そこから研修しなければならないというのもあろうかと思いますので、会議所ができるところはそういったところをやらせていただきたいと思っております。またいろいろなアイディアがありましたら、お互いに連携といいますか、こういうものをやりたいということで、協力してやらせていただけたらと思います。

古賀座長：但馬副座長さんありがとうございました。その他ご意見などございますでしょうか？

鳥取県西部総合事務所地域振興局長：その他ということで先般、前田委員さんからお話いただきました、生活コストを下げるという点に少し関連するんですけど、その生活コストに関して、ご承知の方も多いと思いますが、経済産業省が３月に公表されました、「地域の生活コスト見える化システム」というのがございまして、地域ごとのいろんな生活コストというものが暮らしやすさの指標として、例えば病院の近さだとか、スーパーの近さだとか、そういうものをコストとして積み上げていって、移住定住するときの参考にしようというようなシステムができております。３０代夫婦と子ども乳幼児がいる世帯がそのシステムを使って、コストを図った場合、米子市が全国１位だったということがありまして、これはすごいことだなと思って、少しシステムを調べてみたんですが、このシステムそのものはエクセルのマクロでありまして、いろいろな指標、先ほど申し

上げた生活利便性ですと、ショッピングセンターへの距離ですとか、飲食店の集積とか、バス停・駅までの距離あるいは通勤・通学時間ですとか、小中学校までの距離、病院・診療所までの距離、災害の頻度、あるは水の綺麗さとか、食材の入手のしやすさ、などいろんな項目があるんですけど、これを２０代から７０代まで、そして夫婦と子どもの数、それからライフスタイルが利便性重視か、農村郊外型重視かという、いろんな分類があるんですけども、それぞれの分類の中でシミュレーションして、先ほど申し上げたいろんな項目については、ライフスタイルと年代によって、例えば子育て世代ですと、保育所の待機児童の数というのが重視になりますし、単身世帯ですと、その項目は除外されるといったような、いろんな項目に軽重をつけてシミュレーションするというシステムがございます。それで調べてみますと、３０代の夫婦の乳幼児のいる世帯だけでなくて、５０代の夫婦のみの世帯、利便性志向も農村志向も、６０代もそうですし、３０代の夫婦と中高生の子どもがいる世帯も、これみんな米子が全国１位だったんです。いろんなパターンがありますので全部調べきれてないんですけど、かなりの頻度で米子が全国１７４１市町村の中で１位になったということがありました。これはすごいことだと思いまして、これを何とか活かせないかというふうに考えますと、先般前田委員さんがおっしゃいました、生活コストというものが、目に見える形ではないんですが、米子が生活しやすいといろいろ言われている、それをもし目に見える形にしたらというシミュレーションなのかなと思いまして、そういうことが米子のポテンシャルでありますので、可視化することによって、魅力の土台として活かせるんじゃないかと思いました。一つは移住定住の宣伝材料にしたらいいなということが一つと、それから今後ＫＰＩとかいろいろ出てくると思うんですが、その中で基礎数字として基礎体力というか、米子のポテンシャルとしてすでにこういうものがあるという、指標そのものが小中学校の距離だとか、病院の数だとか、すでに社会資本としてこの米子に備わっているもの、あるいは水の綺麗さだとか、自然環境など、もともと備わっているというものなので、おそらくこれはポテンシャルとしてあまり変わらないということで、それをベースにしてこの戦略をプラスアルファの要因をどう作るかという観点で作っていってはどうかという点でございます。そういった生活コストが目に見えないところが総合ポイントとして非常に高いんだというところに視点を置いて、戦略の中でも少し力点を入れて考えていってもいいんじゃないかなという一つの意見でした。

古賀座長：地域振興局長さんありがとうございました。生活コストをランキングにすると、米子市が１位になるということで、知らなかったですけど、とてもすごいことだと思います。総合的な評価なので、何がすごいのかがはっきりしないと思うんですが、その辺を分析することで、さらに補強するところはどこなのかというのをじっくり見つめ直してみるということがあってもいいと言いますか、してみたらどうかなというふうに思いますし、宣伝材料アピール点として、移住定住のためのまちのアピールに使うということも、とてもいいアイディアだと思いました。
これに関しまして何かご発言等ありますでしょうか？まず市の方から何かありますでしょうか？

永瀬室長：地域振興局長さん、ありがとうございました。実は経産省の暮らしやすさランキングのことは了解しておりまして、内々にはいろいろどういった分野で、クロスの関係になっておりまして、大きく分けると都市型志向なのか、農村型志向なのか大きな分野で、都市型を志向される方々にはそういった指標でもって計ってみると、総合的にクロスで全体の７割程度の分野で１位になっているという事実がございます。

今後米子市としては、せっかく強みの部分にもなりますので、先ほど提案していただきましたような、移住定住のＰＲのひとつの素材として使っていったりとか、そういうことは検討していきたいなと今考えているところでございます。ありがとうございました。

観光課長：地域振興局長さんありがとうございます。今のお話の中で、米子市としてはアピールとかＰＲとかいうことが、はっきり言って下手だというところを認識していまして、今年度の地方創生の中で、２月か６月に緊急で予算を計上しまして、特に若者に向けたＳＮＳを活用したというような地域おこし協力隊の事業で、今までとは全く違った形で市のアピールをしていくというような取組を組んでございます。９月の中旬からは稼働させていきたいと考えておりますので、またそういった動向をみていきまして、アドバイスをいただいたり応援をいただいたりという形で一緒になって市の方の活性化にご協力いただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

古賀座長：ありがとうございます。若者のＳＮＳとはどういったものでしょうか？フェイスブックみたいなものを考えておられるでしょうか？

観光課長：市のホームページを見ていただきますと、例えば動画が見れないとか、いろんな意味での普通の、非常に立ち遅れた情報発信になっております。一番は動画を使っていくということです。それからフェイスブックとか、ツイッターでありますとかそういった５、６項目のＳＮＳの情報発信が現在ありますので、それに２０１２年の鳥取県が応募されたまんが王国建国の事業から、米子市にはポップカルチャーを使って地域を活性化させようという大きな団体が３つありますので、そこと協調してポップカルチャーとＳＮＳという形での情報発信で、今まであまりアピールしなかった若者の方に米子の情報を届けていく、というような戦略を立てておりますのでよろしくお願いしたいと思います。

古賀座長：ありがとうございます。この地域振興局長さんからのご提案につきまして、委員の方から何かご意見などありますでしょうか？

中元委員：今言われた、米子のポテンシャルの高さですね、一つ一つの素材は本当にいいものがたくさんあると思います。でも２０代とかそういった人たちには、なかなかそういったものを魅力として感じることができないのかなと。それは食事であったり、自然であったり、まちの規模とか、そういったものは求められていないのかなと思いまして、私達青年会議所として、そういったものを何とか活用できないのかなというものも少し考えておりました。資料として提出すればよかったんですが、住みやすい街、コンパクトな街ですね、そして高度医療がある街といたしまして、米子市というか伯耆地域全体をホスピスとして考えて、自然のやさしさだったり、安全な食、これはＪＡさんだとか農作物、そういったものが関連してきます。そして医大さんが医療機器などを開発されていると思います。なかなか行政としては、介護が必要な方などに対して、バリアフリーだとか、いろいろな場所に対応することは予算的には難しいと思います。そういったものの旅行プラスさらには裾野としてビジネスプランといたしまして、それから介護用品を開発してそれを売っていく。そして旅行会

社と連携して、介護ツアーというのはこの近年からあるんですが、この１、２年ですね、特に余命僅かな方々の家族への旅行の提案という、プランニングっていうものがビジネスモデルとしてできております。そういったものを活用して、誘致をしていただけると高度医療との連携であったり、旅行会社、またこちらは介護施設がたくさんありますので、そういった方々にもツアーコンダクターとなっていただいて、いろいろなところをアピールできるんではないかなと思っております。

そしてこの地域は海外との連携がありますので、医療制度の関係で人間ドックとなどは難しいかもしれませんが、特区とかということにも繋がっていくのかなとも思いますので、一つの考え方としてそういった方々のツアーモデルですね。私も父が１０年前に他界しまして、その前だとか余命僅かでしたので、少し高くても思い出に残るもの、そしていいもの、そういったものを求めますので、お金もたくさん落ちるということがあります。そして地域の方々も、そういった方がたくさん来られる街ということになりますと、思いやりだったり、助ける心、そういったものも育まれるのではないかと思いますので、街全体として相乗効果が持てるのかなと思いましてご提案させていただきます。

古賀座長：ありがとうございました。終末期を迎える方々の旅行、とてもいいアイディアだと思います。あるいは私達医療機関ですけれども、医療ツーリズムといったことも、これまで何度も検討してまいりました。医療ツーリズムを進めるためには、地域の医療体制との連携ということが大事になってきますし、旅行会社、ガイドをしてくれる方とか、通訳の方の体制ですとか、様々なことが必要ですけども、この米子にロシアから患者さんとして来て、こちらで全て人間ドッグを受けて、体を治して帰りたいというようなニーズというのは確かにあるということで聞いておりまして、そういう形で海外からの医療ツーリズムということもひとつのテーマとして考えております。もちろん国内でも様々な、都会からこういった落ち着いた街、温泉もあり、食もあり、そして医療もある街というのはなかなか少ないと思いますので、そういったところをアピールしていくということも、とてもいいのかなと感じます。
この中元委員さんのご提案について何かご意見などありますでしょうか？市の方から何かありますか？

観光課長：中元委員、ご提案ありがとうございました。医療ツーリズムについては、５年くらい前から観光庁さんのほうが入られて、観光課の方といろいろ調整させてもらっているという状況です。市の観光課としては、交流人口というのを一番重点的に考えています。人が来れば消費がうまれますよということで、そういった中で何で集客していくかということを少し考えておりまして、中元委員が言われたような事も含めまして、特に鳥取大学医学部附属病院さんには、チャンスを活かして集客力のある都市に持っていくキーパーソンの方がおられますので、話を進めさせていただくという形での取組を実施してまいりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

古賀座長：よろしくお願いします。市からは以上でしょうか？委員の方から何かありますでしょうか？提出資料等ない方でも提案などございましたら、ご発言いただけたらと思いますが、何かございますでしょうか？

但馬副座長：前回の有識者会議のときに提案させていただきました。鳥取大学さん、あるいは病院と医

学部が米子市に及ぼす経済波及効果等は非常に大きいものがありますということと、鳥取大学医学部さんが取り組んでおられる事業等も、非常に高度なことに取り組んでおられるということに関連しまして、医療福祉機器関連の人材育成・確保を図るために、米子高専に医療工学の専攻科を設置するように働きかけをして欲しいということと、医療福祉関係者が集う拠点の確保提供をお願いしたいということを言わせていただきましたが、これに関連してもう 1 点追加と言いますか、ご提案と言いますか、総合戦略の中に取り込んでいただけたらと思っておりますのが、古賀座長さんがいらっしゃいますけど、高度医療推進センターさんが取り組まれる医療福祉バレー等に関連いたしまして、あともう一つはバイオフロンティア事業ですとか、いろいろな事業に関連して取り組んでいかれる中で、やはり病院の用地というところは非常に狭あいと言いますか、余裕がなくなってきているんじゃないかと思います。また患者さんが通院で来られるための渋滞が発生しているといったようなことも鑑みまして、医学部あるいは附属病院の環境整備と言いますか、機能充実をしていくためにも、そういった用地の確保と言いますか、提供等について、何らかの形で総合戦略の中に盛り込んでいただくことができないかなということでございます。

古賀座長：但馬副座長さんありがとうございます。私達鳥取大学医学部附属病院の機能を充実して、さらに医療体制をよりよい形で進めていくための提案だということでいただきました。これに関して市の方から何かありますでしょうか？

企画部長：ありがとうございます。但馬副座長さんに答える前にですが、実は議会にもこの人口ビジョンと、総合戦略の骨子というものをご説明させていただきました。その時に出た主な意見が、日本全国どこの自治体でも総合戦略の策定に取り組んでいるんだということで、いわゆる金太郎飴になってはいけませんよと、米子の強みですとか、特徴ですとか、地域資源、こういったものを活かした米子市の独自性と言いますか、米子らしい総合戦略を策定してくださいというような指摘が議会からありました。そういった中で、8 月 6 日と本日の 2 日間に渡りまして有識者の皆様からいただいたご提案といいますのが、この米子市の強みですとか特徴を活かした提案でございました。そういった点では非常にありがたいと思っております。

但馬副座長さんが言われました、鳥取大学医学部への協力・支援ということに関しましても、市長を本部長とします米子市地方創生推進本部という組織も作っておりますので、その中でこの提案に限らず、すべての委員さんのご提案につきましては、真摯に受け止めまして検討をさせていただきたいと考えております。よろしくお願いします。ありがとうございました。

古賀座長：ありがとうございます。先ほどの但馬副座長さんのご発言に関連しまして、米子市の特徴としていくつか私の方から、委員としてのご提案させていただきたいと思います。3 つほど提案を考えてまいりました。まず私達、米子市が持っている一つの特徴で、私達がずっとここ最近医療開発など積極的に進めておりますけど、その中で際立ってきたのが、ロボットの活用でございます。米子高専さんの技術、あるいはロボット会社が米子市内に移ってまいりました。そういった企業さんなどを使って、ロボットを活用したまちづくりっていうものが一つの方向としてあり得るのではないかということでご提案差し上げたいのが、市のご提案のⅡに関連すると思いますが、この米子市内の安心・安全に暮らせる街というふうに進めていくための、政策

としてＣＣＲＣというようなことが謳われております。ＣＣＲＣというのは、こちらに定義づけしてありますように、都会の高齢者が地方に移り住み、健康状態に応じた継続的なケア環境の下で、自立した社会生活を送ることができるような地域共同体と定義づけされております。これを推し進めるための一つの方法として現在まだ基礎検討の状況ですけども、考えておりますのが、見守りロボットというものでございます。これは県内のロボット開発会社と共に検討を進めているものなんですけど、高齢者の自宅に置いて、その高齢者の見守りをするというロボットなんですけども、これをロボットに取り付けられたカメラの映像をネット回線を通じて、遠隔から見ることができると。例えばそれが遠隔に住まわれる家族であったり、お医者さんであったりといったことがあってもいいのかなと。お医者さんがそれを見てもし何か異常が見つかれば、すぐにそこのロボットに取り付けられているスピーカーを通じて声をかける、あるいは緊急性がある場合は緊急的な措置、救急車を呼ぶとか、あるいは往診に行くとかそういう形のサービスを進めることができないかと考えております。米子市をぜひモデル地域として、こういったことを進めることによって、地域の医療体制をさらに充実させることができ、安心・安全なまちをつくることができるんではないかなというのが一つのご提案です。

もうひとつ但馬副座長さんからも触れていただいきました、私達の医療機関としての体制整備としてぜひ整備をお願いしたいと思っておりますのが、これもやはりＣＣＲＣの高齢者が安心して暮らせるまちづくりのアピール点として考えております。幸いなことに米子市は医療機関が充実していて、安心・安全であるということが大きなアピール点になっていると思うんですけれど、私達鳥取大学としては、昨年、ヘリポートを設置しました。ドクターヘリによって地域の医療をさらに支える体制を作るということでやっております。現在、鳥取県主催の会議がありまして、「鳥取救急医療体制高度化検討委員会」というのが行われています。明日も第２回が開催されるということになっているそうなんですけれども、こちらでドクターヘリの活用に関して様々な問題に対して議論するということが行われております。その回の第１回としまして、鳥取県にドクターヘリの体制があるのは、私達、鳥取大学医学部附属病院ということで、こちらを鳥取県の特に中・西部の医療のドクターヘリを活用した拠点として指定して、そこを中心としてこれを進めるべしということが決まったということでありまして、このドクターヘリによる医療体制というのの整備を現在検討しているところなんですけど、問題になっておりますのが、ヘリコプターの格納施設がないということなんです。ぜひこの鳥取大学病院の近くに、こういった設備を置いて、そして円滑にこういった医療を実施することができるような体制整備をお願いしたいと考えております。私共、対象地として米子港辺りにというのは思っているんですけど、近いところにないとなかなか円滑にすぐにそういった医療というのができませんので、そういった意味合いもあって、近くに用地をぜひ確保していただければと考えております。

３点目ですが、これはどちらかと言いますと、ご提案Ｉの方になると思います、10 ページ、11 ページ目に繋がる、ＣＣＲＣとも関連するんですけど、私達鳥取大学医学部附属病院でも、定年退職者というのをたくさん雇用しております。定年を迎えると多くの人は仕事を辞めてしまうわけですけども、突然仕事を辞めてしまったことで生きがいをなくしてしまうとか、そういう人々がいるというのをよく聞くんですが、団塊の世代とか多くのシニア世代というのは、まだまだ元気で第二の人生で何か一花咲かせたいと思う人々がたくさんいらっしゃるわけです。私達鳥取大学でも同じなんですけど、第一線でこれまで働いてきた人々というのは、多くの知識や技術、あるいは業界のネットワークなども持っていて、そういったものっていうのは私達の仕事にも大きく役に立つわけです。そういった人々に仕事のチャンスを与えることによって、多くのシニア世代、団

塊世代を中心とした人々の移住定住を促すことができるんではないか。そういう意味では元気な意味でのＣＣＲＣっていうのをまず進めることができるのではないかと考えます。このＣＣＲＣに関しまして、私達医療機関としての体制もしっかりと十分な地域医療に対しての体制を整備していって、そしてシニア世代の人々が安心して過ごせる街づくりも行うことで、そういった人々の移住定住っていうのも望めるんではないかなというふうに考えます。ぜひそういった方向でシニア世代の活躍の場を設ける、そういったことについてもご検討いただければと思います。

以上３点なんですけど、市の方から何かご発言などございましたらお願いしたいと思いますがいかがでしょうか？

福祉保健部長：ご意見ありがとうございます。明日そのヘリ会議に出るのは私でございます。１回目の会にも出させていただきまして、ドクターヘリの必要性であるとか、現在非常に需要があるというようなお話を委員の皆さんの中でしておられました。格納の場所というとこでございますが、今私がここでどこの用地っていうことが言えませんが、米子市としてできることがあればということを考えておりますので、また会の方でもご意見を聞かせていただければと思います。

またシニアの方の生きがいづくりと言いますか、本当にそれぞれの方が培っていただいた知識や技術等を活かしていただきたいというのも、我々も思っておりますので、それを活かしたい方、活かしていただきたい場所というのをうまく繋げるような仕組みづくりというのを、またみなさんからご協力いただきながらぜひ作っていきたいと思っているところでございます。

古賀座長：ぜひよろしくお願いします。その他何かありますでしょうか？

岡村委員：先週もＣＣＲＣのことでコメントをさせていただきました。古賀座長様言われるとおりの、アクティブシニアの方に移住していただくということは、経済としても潤ってくるというふうに思ってますので、ＩＴも使いこなせる世代が高齢化になってくるということもございますし、今団塊の世代が６６０万人くらいと言われています。１％の方が移住されても６万６千人という、なかなかそう簡単にはいかないかもしれませんが、そういう方々が地元で消費していただくということは非常に大きいマーケットになっていくんじゃないかなというのが一つと、また退職後約２５年と見てもまだまだ長い第二の人生、そこにもう一度やりがい、生きがいを求めていくためには、我々民間としても再就職の場というのも提供していかなければならないと思っておりますし、先ほどもありましたけど、今まで培われた知見、ノウハウっていうのも、この地域に役に立つということがたくさんあると思いますので、ＣＣＲＣの推進は強力に進めていただければと思いますし、先ほど来、医工連携という話もでております。先週東京圏の高齢化が問題になるということをお話させていただきましたけど、これからも諸外国も同じ高齢化という問題に直面していきます。その際に外国人の移住っていうのもあると思うんですが、医工連携で培った新しい医療、介護の技術ノウハウっていうのは輸出ができるんではないかと、新しいマーケットもそこで生まれてくるという仮説も立てられると思いますので、そういった医工連携も進めていく上での、行政も民間も連携しながらやっていければと思っております。

古賀座長：ありがとうございました。岡村委員さんおっしゃるように、医工連携に関しては特に医療機器ですとか、そういったところは非常に優れたものづくりができる企業さんの、まだそういった技術が及んでいない分野でありまして、医療機器には様々な新しいビジネスチャンスがあるということがあります。そこに日本だからこそできることがあるということ考えておりまして、私達も積極的に米子市の一つの産業拠点にできればということで、先ほどから但馬副座長さんから触れていただいておりますけど、医療機器バレーということを考えておりますけれども、まだまだこれから企業さん等の連携というのもしっかり考えていかなければ行えないことですけれども、そういったことに積極的にチャレンジしていきたいと思っておりまして、こういった医療関係の産業の人材というのは非常に不足しておりまして、やはり多くの企業さんが、なかなか外に出さない、こういったノウハウを守るという文化がありまして、外に出て来ないんですね。ですからＯＢの方に入っていただくということを私達よく考えます。そういう方々には、この医療機器開発の様々なノウハウですとか、あるいは業界関係の人脈ですとか、そういったことに強いサポートをいただけると考えていまして、ぜひそういった形でシニア世代の活躍の場というのを重視してやっておりますので、ぜひご検討いただければと思います。

４．その他

（事務局から今後のスケジュールについて説明）

５．閉会